

39 南宋代の体系的脈状記載について

中 川 俊 之

日本鍼灸研究会

緒言

脈診において最も重要な課題は、脈状の相互関係を
 知ることである。脈状の相互関係を知るには、複数の
 脈状を配列した体系的記載（例えば『脈経』二十四脈
 状）の調査が不可欠である。これら記載を見ると、脈
 状は平面的なものでは無く、幾つかの分類により構成
 されていることが解る。体系的記載における分類法の
 解析は、脈状の相互関係を知る上で最適の作業である。
 本稿では、脈診が隆盛期を迎える南宋の医書として、
 施発著『察病指南』（一二四一年成立）を検討資料とし
 た。本書の脈状記載とそれまでの記載を比較し、脈状
 記載の発展過程を明らかにしたい。

『察病指南』以前の脈状記載

『脈経』以降、『察病指南』に至る脈状記載は以下の

様に変遷した。

【分類法】

大きく相類分類と、陰陽分類に分けられる。前者は
 『脈経』、『平脈略例』、『亡名氏脈経第二種』であり、後
 者は『玄感脈経』、『千金方』、『千金翼方』である。ま
 た、『脈訣』に見られる七表八裏九道脈の分類は、この
 陰陽分類から派生したものである。北宋から南宋の脈
 状記載は全てこの分類を採用している（『脈粹』、『傷寒
 類證活人書』、『察病指南』など）。

【脈状数】

一九種（『平脈略例』）から二四種（『脈経』二十四脈
 状）までの種類が有る。脈状の性状としては、賊脈
 （病脈状）と死脈（予後不良の脈状）に分かれる。

【脈状の説明文】

『脈経』↓『千金方』↓『傷寒類證活人書』の系統と、
 『玄感脈経』↓『千金翼方』↓『脈粹』の系統に分ける
 ことが出来る（『平脈略例』や、『素問』王冰次注、『難
 経』楊玄操注には両系統が均等に見られる）。

『察病指南』の脈状記載

本書は上中下三巻の構成で、中巻に記載される「弁七表八裏九道七死脈」に脈状記載が見られる。脈状の構成は、「〔七表脈十八裏脈九道脈〕+（數脈、大脈）+七死脈」の形式である。

【分類法と脈状数】

分類法は『脈訣』に従い、七表八裏九道である。七表脈、八裏脈の配列は『脈訣』と同じであるが、九道脈は、促脈、代脈の位置に相違が有る。また、九道脈に続いて數脈、大脈を記載する為、病脈状は合計二六脈状となっている。病脈状の後に続けて七死脈を記載する形式は、『脈粹』と同様である。全体の脈状数は二六の病脈状と七死脈で三三脈状である。

【脈状の説明文】

病脈状の文（六五五字）の内、三四三字が他医書との同類文である。『脈経』二十四脈状との同類文が一三六字（二〇・七％）、『脈訣』同類文が一五七字（二三・九％）『玄感脈経』同類文が五〇字（七・六％）である。『脈訣』同類文が若干多い。

七死脈はほぼ『脈粹』との同類文で占められており、

一七七字の内、一五五字（八七・五％）を占める。